

生き埋めの刑

高知県 東條 平八郎

昭和二十年八月の終戦後四年間、奴隷のようなシベリア抑留生活の苦難の日々がまぶたに浮かび、まあよく生きて帰れたものだといつも思います。

私は昭和十五年末、善通寺師団西部三六部隊（山砲連隊）に臨時召集され（当時二十歳）翌年三月解除になりましたが、同年再び応召、満州虎林二五一部隊（山砲）に入隊、昭和十九年七月鉄道四連隊（牡丹江）に転属以後北支を転戦した後、ソ満国境の警備のため二十年七月末新京に到着。次期戦闘準備中十数日を経ずして、八月十五日の終戦詔勅を耳にしました。

その翌日早くも新京上空にソ連機十機ぐらいの編隊が威圧飛行を間断なく敢行、明けて翌日はソ連軍の超大型戦車約五十台と多数の将兵が怒涛のごとく侵入し、日本軍の検索と併行してすべての兵器の一括集結を命じ、こ

れを没収しました。武器なき部隊は軍隊ではなく、無政府状態の街中に出ると、現地人などが腕時計等を強奪し、抵抗したため彼らに殺されたり、無差別殺りくが数か所で平然と行われ、二、三人組の外出は危険でありました。

数日後、『日本軍ハ敗戦ニヨリ完全武装解除サレタガ、ソ連軍ハ日本人ノ身ヲ守リ、全員無事祖国ニ帰スト言ッテイル。コレカラ関東ノ酒保ニ行クガ、自分ノ持ち帰レルダケ品物ヲ梱包セヨ』と通達がありました。未だかつて味わったことのない日本帝国軍の崩壊で奈落の底に落ちゆくような日本の姿を想像し、ただ茫然と悲嘆に我が心も沈み、複雑に交錯する理性の中に、ただ一つ故郷に帰れる安堵感のみがありました。

小隊長の誘導で酒保倉庫に入り、「アッ」と驚きました。あの戦時中、「一億火の玉ほしがりません勝つまでは」の国策のもと儉約と節約を至上命令と信じていた私たちの目の前に、万年筆・ペンシル・腕時計・毛布・布団・革長靴・革手袋・多種多様の缶詰、またあの当時内地ではなかなかなかお目にかかれない男性用ポマード・女性

用白粉・クリーム・ドレス・華麗な下着等、あらゆる生活用品がギッシリと山に積み重ねてありました。

いよいよ内地に帰るのだという期待に、雑のうへ何十本と万年筆をわしずかみする者、女性のドレスを入れる者、缶詰を一ケース繩締めする者、面白いことに星一つの二等兵が将校服を背のうに入れたり、短い靴を長靴にはきかえる等酒保倉庫の中は奇声をまじえ出陣のような騒ぎで、ともかく手当たり次第に兵舎に持ち帰り、帰国準備におおわらわでした。

それから二、三日経過したと思いますが、ソ連軍から「先に列車で逃亡した日本軍が追跡を恐れて橋梁を爆破し朝鮮方面に南下した。後続引き揚げのため橋梁を修理し、終了すればお前たちの部隊と一緒に帰す。よって荷物には軽装とし毛布二枚、雑のう、水筒、飯ごう、日用品、それに冬衣袴を持って行け。その他の品物には氏名、所属部隊名、内地の住所を記入した日印をつけよ」との通達があった。

満州の夜間は冷え込むとはいえ、九月初旬にて日中は随分暑いのには、冬衣袴の持参とはちょっと不審だった

が、二か月くらい要する作業かもしれないと、自問自答しつつ早速指示どおり準備完了、約二十両編成の貨物列車に乗り込む。

車内は入り口を通路とし両側を二段の棚板で区切り、座して頭が天井につかえ、横になり寝返りすると隣の戦友の肩や背、足に当たり窮屈この上なし、全く「豚輸送列車」のようでした。

列車進行中に小窓から外を眺めると、鉄路の道床わきに点々として日本兵のしかばねが横たわり、「ああ、この人たちはこの満州の広野で朽ちてゆくのか」と胸に悲哀の情を禁じ得ませんでした。一日経過すると、北上していることに気づき、「どこへ行くのかなあ、北の方の橋梁修理だろうか」と不安なささやきが聞こえる。三日目になるも北上するばかりで、目的地に着く気配がありません。

「一体どこの橋梁が爆破されたのか」「変だぞ。爆破した日本軍は朝鮮に南下したはずなのに。これじゃ逆方向じゃ」

その一言で車内には異常な不安がよどみました。その

とき指揮班から「今、ソ連将校からもう少しで到着すると連絡があった」と連絡。しかし車中でも三日間十分な食事もせず、このまま作業する気力がないが、どうするつもりだろう。途中時々用便のため寒駅で停車したとき、何か食するものを物色しようとしても、警戒兵の制止で思うようにならず。用便も車中ではままにならず、十センチほどの扉の隙間から用を足す、しぶきが手や顔に跳ね返る。「もう少しで到着……」と聞かされてから、夜を迎え朝を送ってもまるで駅到着の気配なく、数日後には停車駅での警戒がいつそう嚴重になり、水汲みも警戒兵に付き添われた炊事当番者のみとなったのです。

七日くらい経過したと思いますが、まだ明けやらぬ早朝、静寂としたどこかの小駅に到着したようでした。発車する様子はありません。

白々とようやく朝の光が車内に差し込み、何となく小窓の外を眺めたとたん、脳裏を驚愕の電波が突き抜きました。大きな川の向こうに赤、白、青の屋根で、大小さまざまな洋風の建物が点在していたのです。

「ソ連領だ、やっぱりそうだったかっ、だまされたっ

！」

そこはソ連国境北の果て黒河で、黒龍江（アムール）の対岸はブラゴベシチェンスクで、最初から橋梁修理なんて真っ赤なうそで、私たちをだまし続けていたのです。

ブラゴエから二日間シベリア鉄道で西に走り、小さな駅で下車し山道をまる一日の強行軍にて到着したところが、チタ地区のシャフタマというモリブデン鉱石を産出するソ連囚人流刑地でありました。

後日警戒兵によると、自分たちが到着するまではソ連政治犯や、ドイツ捕虜が起居していた鉱山収容所だったとのことでした。

宿舎は建物全体が土の中で、輸送中の貨車二両分を屋根の部分で地上に出し、それから下を地中に埋めたようなもので、入り口は階段で部屋におりる構造でありました。

新京出発前や輸送列車内で、幾度となく身体と所持品の検査、並びに物品の強奪を受けて危険性の物は何一つ持っていないのに、入所と同時にまたも同じような検査

が一日中行われ、どうにか隠し持って来た時計や万年筆、ペンシル等を発見され、警戒兵に強要され、提供しなくてはなりませんでした。

収容所は山のゆるやかな斜面で、約一キロの周囲に高さ八メートルくらいの丸太を十センチ間隔に立て、その丸太の内外一・五メートルのところに高さ二メートルの丸太を同じように立てた二重の丸太囲いで、それに有刺鉄線が無数に張られ、犬の子一匹の出入りもできず、四隅の物見やぐらには昼夜を問わず警戒兵が自動小銃を肩にかけて嚴重な監視を怠りません。

労働は四、五十人が一グループで、五列縦隊にて収容所より約四十分の作業場に行くのですが、途中警戒兵が捨てる二センチくらいのたばこの吸い殻を警戒兵の目を盗んで拾い、数人の戦友で一服ずつ分けのみしたり、道端のソ連人家のごみ箱をあさり、なかば腐敗した大根、ニンジン、キャベツ等のはし切れをポケットにそつと入れ、収容所に持ち帰り岩塩で手もみして食べました。この岩塩も自分の持っている靴下やタオル等を作業中にソ連人と交換して手に入れたもので、まずは生きゆ

くための貴重品で、この物々交換によって自分たちの死を救ってくれたことは見逃せません。

交換条件は、収容所の所在地の環境、相手の欲望の強弱、取引の手段等によって千差万別でした。例えば、直径五センチ子供のおもちゃのような丸型鏡と、長さ四十センチくらいの大型パンと交換すると、そのソ連人は鏡に自分の顔を映して「ハラシヨ、ハラシヨ」と大喜び、生まれて初めて自分の顔を見たような感激ぶりでした。矛盾しているのは腕時計との交換も同じ条件だったりすることです。

作業場への往復行進中は常に下を見て、道の凹凸や小石に気をつけないと、つまづき転倒するようになりました。ひどいときは、「アッ、あそこに十センチくらいの小石があるから気をつけろ」とその手前から自分に言い聞かしているのに、そこを通過するときに足が上がついていなくて転倒する。これは足を上げる力もないが、また上がっていても通過する瞬間の時間感覚がないことです。

一食がたばこ一個くらいの食パンで、作業場に到着しても作業する体力も気力もない状態でした。作業は不良

品のスコップ、ショウレンを携帯し、幅一・五メートル、高さ一・五から二メートルくらい、の鉱道奥深く進入、二人が一組で所定の現場に分散。暗闇の中でにぶいカンテラの光を頼りにただ黙々と作業を続けながら、両親や肉親そして故郷の山や川、友と一緒に腹いっぱい楽しい食事をしたときのことなど思い浮かべ、いつの口帰れることやらと、我が身の哀れさに涙の出るのを押さえるのみでした。

オンボロのトロッコに打ち崩した原石を積み、満載になると手押しで鉱道外の山肌へ投下し、鉱内の汚染された空気が解放された一刻に外気を十分吸い込んで、また空のトロッコを押し現場に引き返していく同一作業が間断なく一日三交代で課せられました。

特に零下三十度以下の深夜作業は、その苦痛が極限で手も足もヒリヒリと痛み、作業進展も減退し、加えて空腹が我が身を消してゆくようでした。

作業を終えて帰る道すがら、ふと見上げると澄み切った寒い夜空にこうこうとして輝く月を見て、また故郷のことを思い出して、ほおに涙の流れを禁じ得なかったで

す。冷たい月でした。

暖かい時期の伐採作業も重労働であったが、休憩時間に名も知らないキノコや食べられそうな野草、木の実を採集し、これを収容所で食べられるのが楽しみでありました。

六か月くらい経過するころから、栄養失調のため戦友のしかばねが山に運ばれていく光景が見受けられるようになり、それとともに暗い宿舍内のあちこちでヒソヒソ話が出始めました。

「このままでは、おれも体がだめになる」「地図は持っていないか」「磁石はないか」「可能性は絶対ないぞ」「だけどこのままじゃ……」等々。逃亡計画を決行せんとする者、これを制止する者、ただ黙って考える者、構想は違えど望郷の念は皆同じであります。生きたい、生きて帰りたい……。

ある夜、収容所内に非常警報の金属音（鉄道のレールをつるして金づちでたたく）が響き、全員集合。屋外で一時間以上の人員点呼の結果、隣の宿舍で二人の逃亡者が出た模様で、その後数日間、夜間も警戒兵が数人休

みなしで巡回していました。

それから数日後の朝、作業に出発。収容所宮門を出ると右側で、二人の同胞が電柱でも建てるのか、警戒兵付きで穴を掘っていた。

夕方、作業を終えて帰り宮門入り口を見て、一瞬目を疑い愕然とし、しばし息をのみました。そこには土気色の生首が二つあって真ッ赤な目がキラキラ光っている。「生きている」今朝穴を掘っていた人が、全身を土に埋められ首だけ出しているのです。逃亡者なのでしょう。それにしても何という残酷なことを。「これが逃亡者に対する処遇だ」という見せしめのつもりでしょうが、私は煮えたぎる憤怒に胸も破れんばかりでした。私たちをだまして連行し、囚人以上の過酷労働の責め苦に落とし、生き埋めにするとは。鬼だ、人面夜叉だ、生きてその正体を伝えてやらねばならん！

二日後、二人の姿は消えました。その後も二回逃亡者が出ましたが、そのような処置はなく警戒兵の話によれば、逃亡者のみの懲罰重労働収容所送りで、懲罰永久留置かもしれぬとのこと。さすがに逃亡者はなくなりまし

たが、死亡者は相変わらず続きました。

昭和二十二年、野辺の草に新芽が出るころ、突然ダモイ（帰国）の朗報が通達され、歓喜と興奮に渦巻きました。

出発に際して戦友のしかばね眠る丘に、冥福の祈りを捧げましたが、後髪をひかれるつらい思いで、泣きました。歓喜の炎を乗せたトラックは、砂ぼこりを上げ、一路、シベリア鉄道に向かって前進、まさしく身も心も郷里の空に飛んでいた。

しかし、しかし、またまただまされたのです。喜びもつかの間、次の第二、第三収容所の獄門が私たちを待っているとは、だれが予期しただろう。ナホトカへの道は遠く、着いたのはカクイ収容所で一年間。ナホトカだ、ナホトカに着いた、海だ、帰還船だ！……。

しかし、海を眺め、船を見送るナホトカ港灣の一年間の労役が待っていたのです。

長い四年間の抑留生活を終え、夢にまで見た日本の山々、松の並木が茂る舞鶴港に上陸したのは、昭和二十四年六月三十日だった。

二十歳で故郷を離れ、十年ぶりに故国日本に帰った。

私のシベリア抑留

京都府 向井 弘

九月上旬、我々奉天北陵大学収容所の混成大隊は、黒河よりブラゴエシチエンスクへ渡河、シベリアへ第一歩をおろす。

終戦一か月もせぬ間の入ソ抑留生活。魔のシベリア、一度入って生きて帰った者のいないシベリア等々、雑多の流言の中の抑留入ソで、やはり先行き不安な日々であった。

雨の幕舎で一夜過ごしたあと、列車乗車所まで何キロか歩き貨車に詰め込まれ、いずこへ行くとも不明の何十日かの西への旅となった。用便と食糧受領以外は閉め切りの重い貨車の扉であった。

バイカル湖過ぎ河の岸辺で我々六百余人おろされ、一夜食糧警備に一人で立たされた。銃剣もなしの立哨、こ

れほど心細い歩哨は初めて、つくづく銃剣実砲のありがたさを感じたことはなかったが、事なく使命達成夜明けとなり、食事後河を渡る。

それより徒步行軍一日がかりで宿舍へ到着、ハルハタイというところと聞いた。明治節の二、三日前であった。そのころはもう零下の気温で伐採作業。気温零下三十度を下がる作業待機、気温上昇待ちであった。

十日ほどもたっただろうか、食糧切れとの達示、作業中止が続く。連日零下二、三十度の厳寒と断食の日々、シラミの蔓延、発疹チフスの発生、積雪を食べてのアメリカ赤痢連発、食糧減と絶食により栄養失調症が続発、全員罹病、下痢発熱の最悪状態のラーゲル、日ごとに戦友の姿が消えていった。河が凍結してから、食糧到着したが、罹病者の下痢とまらず、ますます死者の数ふえるのみであった。

十二月にはいったある日、モスクワよりの巡視ありとの報、雪の中をゼネラル・マヨロ（少将）の巡視あり。我ら生残りの日本兵座ったまま、寝たままの姿で防寒姿の軍人ロシア將軍をうつろの目で仰ぎ見るのみであっ